

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	保育学生への卒業研究指導実践に関する事例検討
Author(s)	本渡, 葵
Citation	国語教育思想研究 , 32 : 275 - 283
Issue Date	2023-12-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054826
Right	
Relation	



保育学生への卒業研究指導実践に関する事例検討

新見公立大学 本渡 葵

キーワード：卒業研究指導、保育学生、カリキュラム

1、はじめに

1-1、背景

黄 (2018) は、日本の大学における「卒業研究」を対象とした研究の少なさを指摘し、「特に卒業研究に関わる教育の実態は明らかではない」と述べる(黄 2018,p.31)。この「教育の実態」について、黄 (2018) は、東北の 5 つの教育型大学 (人文・社会科学系) の学生 (319 名) と教員 (100 名) を対象としたアンケート調査から、卒業研究の単位数、ゼミ配属方法、要旨集作成・発表会の有無など、卒業研究の「枠組みの実態」に加え、学生が週あたりどの程度卒業研究に時間を割いているかなど、卒業研究に取り組む「学生の実態」を明らかにしている。

稿者は、大学での卒業研究指導経験が浅い。これまで指導を担当した学生は、保育士養成課程 (短期大学) の学生 3 名 (既卒)、同じく保育士養成課程 (4 年制大学) の学生 3 名 (既卒) の計 6 名である。現在、在学生 4 名の指導を担当している。

2023 年 3 月、所属する大学が 4 年制大学になって以来、初めてのゼミ生が卒業した (先述の既卒 3 名)。稿者にとっては、初めての 2 年間にわたる卒業研究指導をした学生であった。

卒業研究指導を始めるまでは、どのように研究指導をすればよいか不安が山ほどあった。「卒業研究指導法」の実践書の類を探したが、学生を対象とした「卒業研究の進め方」を指南した書籍はあるものの、指導する側を対象としたものは見つけることができなかった。前者やシラバスをもとに、指導の流れを構想し、親交のある先生がたに助言を乞い、大学教員がインターネット上に掲載している指導の事例を読むことで、不安の解消と指導準備に努めた。その過程で、卒業研究を通し、学生には多くのことを知り、深く考える 2 年間にしたいと考えるに至った。

先に挙げた黄 (2018) のアンケート調査では、稿者が指導前に最も確認したいことであった「卒業研

究指導の内実・実際」の実態は明らかにされていない。「卒業研究指導の内実・実際」は、大学や学生により非常に個別具体的である。そのため、量的な実態把握には難しさが伴うと考える。

1-2、目的と方法

本稿では、卒業研究指導経験の浅い大学教員 (稿者) が、保育者養成課程の学生 (以下、保育学生) 3 名におこなった指導実践について検討するものである。2 年間の指導を概説し、3 名のゼミ生がいかにして研究テーマ決定に至ったか詳述する。それをもとに、指導の改善に向けた検討をおこなう。実践の詳細は、指導の記録と学生のレジュメを手がかりとする。対象学生は、稿者のゼミ生 3 名、対象期間は 2021 年 4 月～2023 年 3 月である。対象者には、本稿の趣旨を文書と口頭で説明し、3 名から同意を得た。

2、「卒業研究」—本学科の場合—

本学科は、保育者を養成する学科である。「卒業研究」は「卒業研究 I～IV」から構成され、3・4 年次の必修科目である。単位数は各 1 単位、計 4 単位である。2 年次後期に卒業研究ガイダンス (卒業研究とは何か、研究室配属に関する説明、卒業研究指導担当教員の指導可能分野に関する説明) をおこなう。学生は、2 月末頃までに、興味・関心のあるテーマ、志望進路、自己 PR などを提出し、それらを参考として配属ゼミが決定され、3 年次 4 月にゼミ配属となる。1 ゼミにつき 2～5 名の学生が配属となる。卒業研究を進めるにあたり、本学科では大学の研究倫理審査への申請を全員に課している。卒業研究に関連する発表会は、3 年次 12 月頃に中間発表会、4 年次 2 月頃に最終発表会がおこなわれ、それぞれ発表学年の 1 つ下の学年が聴講する (例：4 年生の発表会を 3 年生が聴講)。卒業論文は、4 年次の 1 月半ば頃に本論を、その 1 週間後を目処に要旨を提出する。卒業研究論文の要旨集は製本し、学生に配布される (2023 年 3 月時点)。

表 1. 「卒業研究」と実習スケジュール

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
3年	ゼミ配属		保育実習 (施設実習)		夏休み		教育実習 (幼稚園)	テーマ発表会				春休み
4年			教育実習 (特別支援学校)		夏休み					卒業論文提出	最終発表会	卒業式

保育者養成課程のため、複数回の実習がある。3年次以降の実習として、保育実習（施設実習）、教育実習（幼稚園、特別支援学校）がある（表1）。また、毎年12月には地域の子どもと保護者を対象とした子どもフェスタを開催している。学生らは、実習と、各事前・事後指導、他の授業やボランティア活動、就職活動、大学行事と並行して卒業研究を進めていくこととなる。

3、卒業研究指導の実際

ここから、稿者の卒業研究指導の形態と内容について、ねらいとともに述べる。

3-1、ゼミ生の実態

2021年4月、希望研究テーマに関する記述と面談により稿者の研究室にヤマダ、タナカ、ノグチ（全て仮名）の3名が配属された。ヤマダ、タナカの2名は保育職を志望しており、ノグチは一般企業への就職を志望していた。ぼんやりとはあるが、3名ともそれなりに興味のある研究テーマを持っていた。しかし、研究室に上学年がおらず、卒業研究の具体的なイメージを持ちにくいことや、「研究」「論文」「倫理審査」など、初学者に馴染みのない言葉を前に、自分たちにできるのだろうかかと心配そうにしていた。

3名のゼミ生は、それぞれが真面目な一面があるものの、3名が揃うと楽しさが勝り、互いを意識して過剰にふざけがちな傾向があった。そのことが、ゼミ中の稿者の問いかけに対しても及ぶ様子が見られた。

大学生活で、読書に親しむ機会は減っているようで、大学図書館の利用回数もあまりないようであった。論文検索の方法について1年次の基礎ゼミナールで教わったものの、日常的なレポート作成で論文を参考にすることはないとのことであった。また、パソコンでのブラインドタッチやwordやExcelなどの操作に不慣れで、レジュメはスマートフォンで入力・作成していた。

3-2、指導のねらいと形態

上記実態から、次の3つのねらいを設定した。①学生の声を聞く、②全体ゼミでの発表に向けて取り組むことを探究する、③全体ゼミでの発表を振り返り次の取り組みを探究する。これらを達成するために、全体ゼミと個別ゼミの2つを指導の柱とした。全体ゼミは学年の3名全員でおこない、個別ゼミは学生1名と稿者とおこなった。全体ゼミは定員が20名程度の小規模教室で実施した。実施場所選定の理由は、2021年4月時点、新型コロナウイルス感染症予防の観点から、グループワークやディスカッションなどの演習等をおこなう際、密を回避し、人との距離を十分置くことが必須であったことによる。

図1は、各学年時の全体ゼミ、個別ゼミ実施回数を3ヶ月単位で合計したものである。個別ゼミの回数は、3名の実施合計となっている。1回あたりの時間は、全体ゼミが90分～120分程度、個別ゼミが60分～120分程度である。

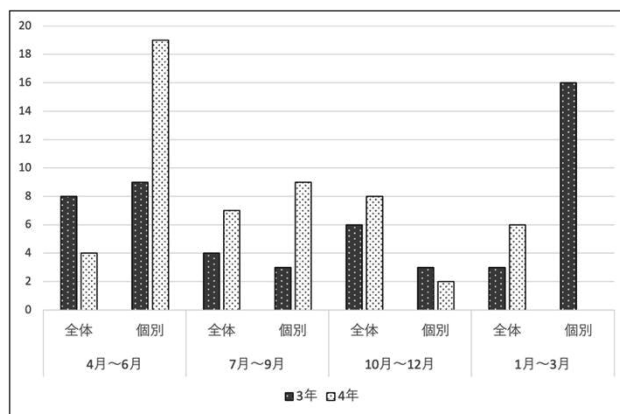


図1、全体ゼミと個別ゼミの実施回数（単位：回）

個々の声、考えていることを聞く（学生にとっては話す）ために、個別ゼミの場での学生の姿をみたいと考え、①のねらいを設定した。②と③のねらいは、全体ゼミでの発表はそれ単体で毎回終わるのではなく、自身の研究を進めるためのものであると学生が捉えることをねらい、設定した。②と③は、個別ゼミの目的としてあらかじめ学生と共有した。

また、学生のレジュメは、以下の構成で作成する

ことから始めた。

【レジュメの構成】

- ・今やっていること、考えていること
- ・読んだ本、論文について（目的、方法、結果、考察、あるいは内容全般）
- ・読んだ本、論文から考えたこと
- ・読んだ本、論文で気になったこと
- ・これからやること
- ・今困っていること
- ・みんなの意見を聞きたいこと

3-3、指導の具体

以下、半期ごとのねらいと、特に意識して取り組んだことを示す。（ ）内は、授業としての開講期間、期間中の実習等である。

1) 「卒業研究Ⅰ」（2021年4月～9月、6月に保育実習（施設実習）あり）

【ねらい】

- ・興味のあるテーマから、自分なりの問いを立てるために、考えを広げ・深める。
- ・2年間の見通しを持つ。

【内容】

- ・これからの2年間のカレンダー（1年が1枚におさめられたもの）を配布し、実習、就職試験、確定している行事（大学祭、学科の子どもフェスタなど）を書き込む。どれくらいの時間が卒業研究にあてられるのかイメージする。それをもとに、各自で2年間の計画を立て、A4用紙1枚に書く。写しは稿者の研究室にあるホワイトボードに掲示。
- ・3名が互いに興味のあるテーマと理由や動機などについて知るために、レジュメを作って発表する。相互に意見を聞き合う。
- ・指導教員である稿者が、なぜ今の仕事をしているのか、これまでの生活や研究していることなどをプレゼンする。
- ・興味のあるテーマになぜ自分が惹かれるのか、テーマを掘り下げていく。
- ・興味のあるテーマに関する本や論文を読み、レジュメを作って発表する。相互に意見を聞き合う。
- ・文献検索、研究論文の読み方、問いの立て方などについて学ぶ。
- ・夏休みはオンラインで全体ゼミ、個別ゼミをおこなう。
- ・「卒論の全体像（稿者作成）」を眺めて、卒論をイメージする。

2) 「卒業研究Ⅱ」（2021年10月～2022年3月、10月に教育実習（幼稚園）あり）

【ねらい】

- ・テーマ発表会（11月）に向けた準備。興味のあるテーマから、自分なりの問いを立てる。

【内容】

- ・動機、背景、目的、方法を明確にしていく。
- ・口頭発表、質疑応答の仕方を学び、練習する。
- ・幼稚園教育実習の前後は、オンラインで個別ゼミをおこなう。
- ・「卒業研究Ⅰ」で取り組んできたことを継続する。
- ・研究倫理審査申請に向けた準備（研究計画書作成）をする。

3) 「卒業研究Ⅲ」（2022年4月～9月、5月中旬～教育実習（特別支援教育）あり、就職活動）

【ねらい】

- ・計画的に研究をすすめる。

【内容】

- ・3年次4月に立てた計画を見直し、新たに今後1年間の修正計画を立て、A4用紙1枚に書く。写しは稿者の研究室にあるホワイトボードに掲示。
- ・研究倫理審査結果にもとづき、研究をすすめる
- ・研究内容紹介（動機、目的、方法）、自身が3年の時に取り組んだこと、現在の進捗状況について資料を作成し、3年のゼミ生に対し発表する。
- ・これまでのレジュメをもとに、論文本体の構成を検討し、各章の執筆をすすめる。
- ・研究倫理審査申請に向けた準備（研究計画書作成）をする。
- ・それぞれの就職活動や実習を優先し、研究にあてる時間配分を決め、取り組む。

4) 「卒業研究Ⅳ」（2022年10月～2023年3月、1月上旬に論文提出、中旬に要旨提出、2月中旬に最終発表会あり、就職活動）

【ねらい】

- ・計画的に研究、執筆をすすめる。
- ・最終発表会（2月）に向けた準備（スライド作成、口頭発表練習）を自主的に取り組む。

【内容】

- ・論文本体の構成を検討し、各章の執筆をすすめる。
- ・執筆部分は、全体ゼミで発表する。
- ・要旨を作成する。
- ・最終発表会に向けた準備（スライド作成、口頭発表・質疑応答練習）をする。

・オンラインでスライド発表の練習をし、スライドの修正をする。

4、学生の事例—研究テーマ決定までの過程—

前節で、指導の形態と具体について示した。しかし、学生によって進度は異なる。ここでは、3名の研究テーマ決定までの変遷について述べる。

4-1、ヤマダの場合

ヤマダは保育職を志望する学生である。興味のあるテーマは「虐待」であった。

4-1-1、2021年4月～9月

以下、2021年4月9日の個別ゼミレジュメの抜粋である（以降、抜粋は原文ママ）。

身近に過去に虐待を受けたことのある人がいることを知り、今まで遠くに感じていたものが、とても身近にあることを知った。自分にも何かできることはないか考えたが、なんの知識もない上に気持ちも分かってあげられずくやしく感じた。虐待という問題はとても難しい問題であり、関わり方を気をつけないと自分まで気持ちが巻き込まれる可能性があるが、まったくわからないままあきらめる^{ママ}のことができないと感じ、卒論で調べて見ようと思った。

ヤマダは、「虐待」に関する何かを知りたい気持ちが強かった。将来、保育者として「虐待」を見つけた時にどうすれば良いかを知りたい、どのような支援があるかを知りたい、虐待を受けた人、虐待をしてしまう人の気持ちを知りたい、などである（2021年5月12日の全体ゼミレジュメ）。知りたい意欲が強いあまり、それらを絞り、研究の問いを立てることに難しさがあるようだった。虐待について知りたい気持ちを大切にしつつ、稿者からは本を紹介し、気になる論文を自ら見つけて読んでいくことを提案した。

海外の児童福祉に関する論文や、虐待とトラウマの書籍・論文などを読みすすめる中で、「本の方が読みやすく、いろんな知識が増えると思ったので、本を積極的に読もうと思います」（2021年6月30日個別ゼミレジュメ）との気づきを得ている。以後、書籍を中心に読みすすめ、「幼い頃に虐待を経験した親の更生プログラムはあるのか」を新たに考えたいこととして挙げている（2021年7月30日全体ゼミレジュメ）。更生プログラムや児童虐待を防ぐための子育て支援について調べていく中で、そもそも

虐待の被害にあったことを誰にも相談できずにいる人への援助はどうすれば良いかを考え始めた（2021年8月10日個別ゼミレジュメ）。さらに、「児童虐待防止のさまざまなプログラムを知らない人また参加しない（拒否している）人に対して子育てをサポートする方法はあるのか」と疑問に感じ、厚生労働省による「乳児家庭全戸訪問事業」の状況を確認し、「しかし、拒否や不在による意思表示が可能であるため、ここでも支援を受けられない人がいる。（中略）全戸訪問事業を拒否した人への支援では何が考えられるかまたそこに対しての新たなプログラムを考えてみようと思う。その中で、高等学校における児童虐待予防教育についても考えてみようと思う」

（2021年9月5日個別ゼミレジュメ）と記述している。その後、国内での国や民間団体による子育て支援プログラムの実態をいくつか確認し、プログラムの現状と課題に関するものを11月のテーマ発表会に向けてすすめていこうと決め、教育実習（幼稚園教育実習）に集中していくこととした。

4-1-2、2021年10月～2022年3月

ひと月の実習を終え、11月に入って初めての個別ゼミでは、実習前に決めていたことからさらに深く考え、その結果、何を目的に何を研究としてやっていけば良いか混乱しているようであった。当日は、A4の紙に、考えていることを書き出して持参した（図2）。

資料をもとに、ヤマダが考えていることを説明してもらった。しつけと虐待の違い、虐待予防の子育て支援の効果はあるのか、支援があっても虐待の問題が無くならないのはなぜかを考えていた。また、将来、保育者としてできることとして保護者との関係構築を見据えていた。書き出した資料の写真をタブレットで撮り、その画像に稿者が書き込みを入れつつ、やりとりをすすめた。保育者として保護者を支えたい思いがあること、これまで確認してきた子育て支援の状況、「それでも虐待は無くならない」とする問題意識を共有した。また、そもそもの動機や虐待に関することに興味を持つきっかけをもとにやりとりを続け、「虐待の世代間連鎖に関すること」に取り組んでいくこととなった。

11月のテーマ発表会では、「虐待の世代間連鎖を断ち切った事例報告などから、支援のあり方について検討する」（2021年11月17日テーマ発表会資料）と研究目的を提示した。発表会では「なぜ虐待の世

代間連鎖に着目するのか」「支援の手が届かない人はどうするのか」「支援をする人は保育士を想定しているのか」「新たな支援を考えるということか」などの質問があった。これらの質問について、「私の発表で出てきたみんなの質問の中に、私が先行研究を見ていく中で、同じように難しい問題として上がっていた」と受け止めている（2021年11月25日全体ゼミ資料）。発表会後は、これらを検討しながら、「虐待の世代間連鎖を断ち切った事例」や、虐待を受けた子どもに生じる反応についての論文を探し、読み進めていた（2021年12月23日全体ゼミレジュメ）。

2022年1月以降は、4年次の就職活動を見据えて、就職試験や試験対策のための期間確保、前期の実習（特別支援学校）の事前準備を優先することとし、「3月末に研究倫理審査を申請する」と決め、研究計画書の作成に入ることにした。研究倫理の話をする中で、「（研究者のように）虐待を受けている、受けていた人を対象に研究をすることは倫理的に難しいが、当事者の手記を何らかの対象とすることはできるかも」と話題にしたことがあった。以下、「なぜ虐待の世代間連鎖に着目するのか」についてヤマダ自身で回答したレジュメ抜粋である（2022年1月19日個別ゼミレジュメ、以降、下線稿者による）。

なぜ虐待の世代間連鎖なのか
 →虐待の連鎖を減らすことが虐待を減らすための一つの方法だと考えたから
 →虐待の世代間連鎖を断ち切るにはどうすればよいのか
 →虐待の世代間連鎖を断ち切った事例から共通点を探す
 →虐待の世代間連鎖を断ち切った事例とは？
 →論文などに上がっている事例に加え、被虐待当事者の手記に書いてある体験談

ヤマダは、当事者の手記を、「虐待を断ち切った事例」としてみていこうと考えていた。そこで、どのくらいの手記が刊行されているのか、執筆者が当事者であることが明らかなものをインターネットで探し、いくつかあることを一緒に確認した。

2022年1月26日の個別ゼミでは、研究計画書の「たまご」ができた。「虐待の世代間連鎖」がなぜ起こり、「虐待の世代間連鎖」を回避するためにはどうすれば良いのか、「虐待の世代間連鎖」について書かれた論文・文献（和図書）と、被虐待当事者によ

る手記から考察する」テーマが決定した（2022年3月24日個別ゼミレジュメ）。

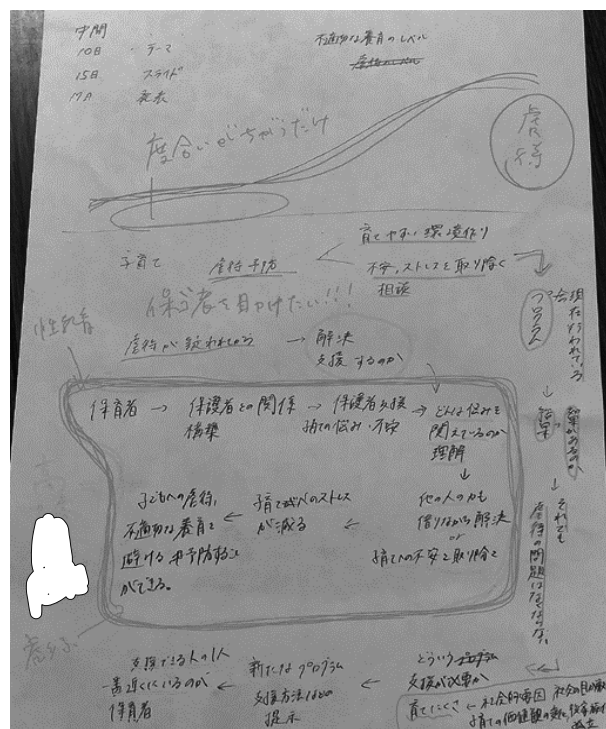


図2. 書き出した資料

4-2、タナカの場合

タナカは保育職を志望する学生である。興味のあるテーマは「素話」であった。高校時代に近隣の短期大学のオープンキャンパスで、その短大生による素話実演を見て感動したことが動機であった。

4-2-1、2021年4月～9月

以下、2021年4月13日の個別ゼミでのレジュメ抜粋である。

素話を行う際に用いる物語はどのような内容が多いのか。またその物語の内容による子どもたちへの影響はどうか。
 素話をした後に子どもたちに絵を描いてもらい、その絵がどのようなものなのか。
 素話と絵本のメリット・デメリット

このレジュメで挙げた関心をもとに、論文や文献を探し、読むように促した。また、「メリット・デメリット」は、「何かに着目した際に」浮上するものであると確認した。

タナカは、素話へのアプローチを模索するため、複数の先行研究にあたった。そのなかで、「疑問を持たず、全て鵜呑みにしてしまう」（2021年5月12日全体ゼミレジュメ）と、研究論文を読む際の悩みを話した。以下、全体ゼミの振り返り抜粋である

(2021年5月19日個別ゼミレジュメ)。

○悩みについて

(鵜呑みにしてしまう、という悩みに対して)今の段階は鵜呑みにして、知識をつけておく。そこから「あの時のあれおかしくない？」と疑問を持てる様になる！と言われて、知識をつけることも大切だと思った。

タナカは、「素話という言葉で検索してヒットした論文を読む」(2021年6月2日個別ゼミレジュメ)ことを継続した。「学生や保育者などが素話にどのような気持ちを抱いているのか気になった」(2021年6月7日個別ゼミレジュメ)、「絵本が出現したことによって、(素話が)消滅していたことに驚いた。素話の歴史についてもっと知りたいと思った」(2021年7月30日全体ゼミレジュメ)りと、タナカの好奇心が多方面に動いていた。そのことが、テーマの決まらない焦りや不安になっているようであった。前期最後の個別ゼミレジュメの記述は、「近年、保育現場で『素話』を扱う園が少なくなっていると感じる」のみであった(2021年8月10日個別ゼミ)。そこで、素話を今後どうしたいのか、自分が実践したいのか、他の保育者にも実践してほしいのかなど、考えを聞いてみた。素話実践を広めたい、自分も含めて苦手意識をなくしたいとのことであった。タナカは、大学生の前での素話実践経験はあったが、子どもへの実践経験はなかった。そこで、10月の教育実習(幼稚園教育実習)で、実習園で素話実践をやってはどうかと提案した。

4-2-2、2021年10月～2022年3月

実習を終え、テーマ発表会に向けた準備に入った。実習での素話実践や、「素話を広めたい」思いを根源とすることで、タナカの研究意欲が高まったように感じた。これまでに読んできた先行研究から、特に保育学生や保育者が素話実践を敬遠する傾向にあることに着目した。何が敬遠の理由かを模索する方向ではなく、初心者が素話を楽しく実践するためにどうしたら良いかを提示する方向に関心があった。以下は、ある保育者養成校での素話実践に関する論文を読んでまとめた、2021年11月5日個別ゼミレジュメの抜粋である。

「そのことば通りに語る」が学生にとって負担になっているのではないか。素話は、絵本や紙芝居のように絵がないので、自分の好きなように物語を変

えることが可能であるし、むしろそれが素話の強みであるように私は思う。間違えてしまったりしてそれは決して悪いことではない。

テーマ発表会では、素話を楽しく実践するために、学生の立場から素話の指導法を提案することを研究テーマとして発表した。発表会の質疑では「素話の効果は何か」「なぜ素話実践は敬遠されるのか」「素話を行うにあたり保育士に必要な力は何か」などがあつた(2021年11月17日全体ゼミレジュメ)。なかでも「素話をやってみて難しかったことは何か」との質問をもとに、これまでのタナカの実践を振り返ることに着手した。12月の子どもフェスタでの実践も含め、すでに3回の実践を経験していた。このうち、大学生の前でおこなった実践は、授業記録として動画が残っていたため、動画を視聴して気づいた点の記述など、振り返りの記述を複数回継続した(2021年11月29日、1月12日、2022年1月17日全体ゼミレジュメ)。

1月後半以降は、研究計画書の作成に入った。実践論文や実践書で提示されている指導法を検討し、自身の実践での気づきをもとに、指導法を提案する方向で作成にとりかかった。しかし、体系的な指導実践の事例を見つけることができずにいた。指導法を検討するために、他大学の先生がどのような指導をしているか聞き取りに行くことを他ゼミの教員から提案され、一時はタナカも検討していた。しかし、3回の実践を経て、指導法よりも、他の人の素話実践をもっと見たい、実践者の実践の工夫の方を知りたい気持ちが高まっていた。

そこで、素話を日常的に実践している知り合いの保育者に相談し、内諾を得ることができたため、インタビュー調査をすることとした。タナカ自身の実践の振り返りをもとに、インタビューでの質問を絞ることとした。インタビューガイドは研究計画書とともに審査に提出しなければならないため、インタビューでの質問決定、インタビューガイドの作成に取り組むこととなった。

4-2-3、2022年4月

インタビューでの質問項目は、2月末～4月末の期間に、何度も検討し直した。研究協力者の拘束時間をなるべく少なくし、負担がないように考慮した上で、実践者に聞く価値のある質問は何かをタナカと話し合い、4月末にインタビューガイドが完成し、計画書とともに倫理審査へ提出をした。最終的に、自

身の実践経験の振り返りによる気づきをもとに、素話実践者へのインタビュー調査をおこない、実践の工夫を明らかにし、初心者が苦手意識を軽減させ、実践意欲を向上させる手がかりを見つける研究テーマへと至った。

4-3、ノグチの場合

ノグチは一般企業での就職を志望する学生である。興味のあるテーマは昔話の絵本に関するものであった。

4-3-1、2021年4月～9月

以下、2021年4月13日の個別ゼミでのレジюме抜粋である。

昔話の絵本について研究してみたい。昔話の絵本には、絵本によって物語が異なるものが多い。そこで、幼児に親しみのある昔話を1つ取り上げ、その物語の内容や登場人物などが時代とともにどのように変化しているのかを調べていきたいと思う。

これをもとに、今回の個別ゼミまでに3本の論文を読むことを約束した。2021年4月23日の個別ゼミで、ノグチは2本の論文を読み、レジюмеを作って持参した。「昔話の変遷」を基底とし、『桃太郎』と『3匹のこぶた』に関する研究論文であった。2021年5月12日の全体ゼミレジюмеには、次の記述があった。

昔と今の昔話絵本では、物語の内容や結末などが異なるものが多いという話を聞き、もっと知りたいと思った。

下線について、どこで聞いたのか確認したところ、他ゼミの教員とのことであった。全体ゼミでは、物語の結末が、現代と異なる絵本を探すことに着手すると決めた。1週間後の個別ゼミでは、「どの昔話を取り上げるか早めに決める」とし、「家にある昔話の本を読んで面白いと思った物語」として『猿蟹合戦』『かちかち山』『花咲か爺さん』『うさぎと太郎』『猿地蔵』『狐と狸』の6冊を挙げている(2021年5月19日個別ゼミレジюме)。

2021年6月30日の全体ゼミでは、医療場面を描いた絵本に関する論文について読み、報告した。これまで着目していた昔話絵本ではなかったため、他のゼミ生からも「なんでこの論文読んだの?」と質問が出た。ノグチは、「読んで中で一番おもしろかった。医療について興味があるから」(レジюмеへ

の稿者メモ)と答えている。それまでのゼミ時のノグチは「やりたいテーマはない」「研究したいことはない」とよく口にしてきたため、これを発端に、「興味のあるものをどんどん読んだ方がいいよ」とゼミ生や稿者は促した。2021年7月30日の全体ゼミでは、科学絵本についての論文を読み、報告した。

ノグチは、10月からの教育実習(幼稚園)の準備に集中したいとのことで、卒業研究についてはここで止めておくこととなった。

4-3-2、2021年10月～2022年3月

実習を終え、テーマ発表会に向けて卒業研究を再始動させた。前回の全体ゼミで報告した論文をもとに、「科学絵本の分析」をおこないたいとのことであった。テーマ発表会では、月刊絵本『かがくのとも』(福音館書店)を対象とし、先行研究と同じ観点から内容を分析する研究をおこなうと発表した。

発表会後の振り返りでは、質問されたことに十分答えられなかったことが悔しかったと話した。「対象とする科学絵本の年代や比較対象とする先行研究をちゃんと決める!」と決意している(2021年11月25日個別ゼミレジюме)。2021年12月1日の個別ゼミでは、発表会で質問されたことについて、近隣の公立図書館に行き、本を探して調べ、まとめてきた。

2022年1月以降は、研究計画書の作成に入った。対象とする絵本の年代をいつにするか、分析の観点は妥当かなど、関連する先行研究を探し、稿者とともに読み、検討を続けた。絵本の年代については、2011年の東北大震災、2020年以降の新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大などを軸としてはどうか検討することもあった(2022年1月19日個別ゼミレジюме)。この期間、論文を批判的に読み、曖昧な論証を指摘する力がついてきていることをノグチ自身も感じているようであった。テーマ発表会の際に分析の観点として用いる予定でいた先行研究についても、不足している点を指摘し、援用をやめることとした。

新たに援用可能な先行研究を探して検討し、3月に入ってから本格的に研究計画書を書き始めた。

4-3-3、2022年4月

対象とする絵本が入手可能か、援用する観点での分析は再現可能かなどを検討し、研究計画書を完成させた。最終的には、月刊絵本『ちいさなかがくのとも』『かがくのとも』のある年代、約120冊を対

象に内容と題材の分析をおこなう研究テーマに至った。

5、検討

5-1、ゼミの形態・回数

全体ゼミと個別ゼミの組み合わせについて、全体ゼミでの発表準備、発表の振り返りを個別ゼミで深めることができた。さらに、研究以外の話をすることができた点でもよかったと考える。就職に関することや生活上の困りごとなどが、研究の話の「ついで」にできたことは、改めて日時を調整し、相談（面談）するより、日頃の学生の状況を確認するのに容易であった。

回数の変動について、図1から、3年次1～3月と、4年次4月～6月の個別ゼミ回数が明らかに突出しているのがわかる。これは、この時期に研究計画書の作成や、共同分析をおこなっていたことが背景にある。また、4年次1～3月の個別ゼミが0回であるのは、1月の論文提出前後や、2月の最終発表会前に、ゼミ生3名で自主的に学生のみでのゼミをおこなっていたことも要因と考える。この時期、ゼミ生同士で集まり研究をすすめる頻度が増えていた。稿者による論文の添削は、チャットやメールで原稿を共有し、直接データ上にコメントを入れる方法をとった。

全体ゼミ・個別ゼミのいずれも回数が少ないのは、3年次7月～9月である。背景には、7月の学科行事に向けた練習、9月の実習準備などがある。3年次10月に実習がひと月あるにもかかわらず、10月～12月の全体ゼミの回数が増えているのは、11月のテーマ発表会に向けた直前での全体ゼミ増加に起因する。

ゼミの実施場所について、全体ゼミは中規模教室で、個別ゼミは稿者の研究室や空き教室でおこなった。研究室での1対1の個別ゼミをおこなう際は、研究室の扉を開放し、密室とならないように配慮した。しかし、学生にとっては扉があいているとはいえ教員との1対1は、あまり心地の良いものではなかった可能性もある。今後、オープンスペースの一角など、他者の目に触れる状況の中での個別ゼミをおこなうなど工夫が必要である。

5-2、指導内容

「疑問を持たず、全て鵜呑みにしてしまう」（2021年5月12日全体ゼミレジュメ：タナカ）とあることから、批判的に読む（考える）ための「読み方（考え

方）」について取り上げる必要があると考える。これは、「質問したいことはない」「気になることはない」（ただし十分熟知しているわけではない）学生と通じるものがあるのではないかと考える。

3-3の稿者の「指導の具体」には、「卒業研究I」で「文献検索、研究論文の読み方、問いの立て方などについて学ぶ」ことを指導の内容としているが、研究論文の読み方についての指導が不十分だったと考える。卒論の全体イメージを持てるように、資料として「卒論の全体像」を作成したが、ゼミ生への提示は3年次8月頭であった。しかし、これらについては意図もある。研究の初学者である学生には、あまり研究に対して構えて欲しくないと考え、型を示すことが、学生の思考を矮小化してしまうのではと危惧したからである。

また、この点については、本学科のカリキュラム上の課題にも触れておきたい。1年次に、初年次教育（大学での学び、文献検索、レポートの書き方など）としての基礎ゼミナールがあるが、2年次にその次のステップがなく、3年次にゼミ配属となる。1年次に教示した内容が十分定着しておらず、3年次に再度教示する事態も生じている。

中村（2009）は、「2年次のプレゼミナールは専門プレゼミナールと位置づけ、所属コースの専門分野の基礎を学び味わいつつ、リサーチ・スキルの習得、研究プロセスの体験・習得を再度積み重ねるもの」と考えると役割が整理できるとし、大学4年間の学習階梯の重要性を主張する（中村2009、p.2）で

以上、今後の検討課題とする。

5-3、実習

3年次に2回、4年次に1回の実習があり、実習事前・事後指導を含め、この期間は学生が卒業研究を「保留」することとなる。これは、他の類似大学でも同様である。実習が最優先事項であり、卒業研究は「保留」しても大丈夫だと学生と共通認識を持つことが、実習に注力できる安心につながる。ただし、「保留」から再び動き始めるところで、学生も難儀しているようであった。何をどこまでやったか、何をやる予定だったかレジュメから思い出すところから始まる。

ゼミ生自身のレジュメは消失していることもあり、そのような時はレジュメを稿者と共有することで、「保留」時点までの研究状況を確認するこ

とができた。

実習と卒業研究の連動に関して、今後検討すべき点として、実習での気づき・学び・子どもの姿と、現在の自分のテーマとを関連づけて考える機会の設定である。実習での気づきを、卒業研究で取り組んでいる視点から捉え直すことで、実習の学びと卒業研究のどちらにも何かしらの広がりを持つのではと考える。

5-4、研究を前に進める契機

3名のゼミ生が研究テーマを決定するまで（研究計画書提出）の過程で共通するのは、研究計画書の作成が、研究を大きく前進させている点である。11月のテーマ発表会も1つの契機となっている。ある程度の形として発表し、質問をもらうことで気づいたこともそれぞれにあった。研究計画書の作成、研究デザインを確定しなければならない必要性は、発表会よりも強力な起爆剤となった。研究計画書の作成がなければ、いつまでも「やりたいこと探し」を続けていた可能性もある。

研究計画書作成の負の面は、「どうなるか先は見えないがひとまず穴を掘り続けていく」探索的な研究には向かないことであろう。このような研究も価値はあり、このような方法が適している学生もいると考える。

6、おわりに

2年間の卒業研究指導実践について概観し、3名のゼミ生の研究テーマ決定までの過程に焦点をあてて述べてきた。回想による詳述と、学生のレジュメにもとづく「指導の自己評価」には限界がある。より客観的な分析材料をもとにした検討も必要である。

稿者の指導実践は、「そのゼミ生の場合」そのように指導したに過ぎないものである。その子に応じた教育は至極当然である。しかし、「そのゼミ生の場合」そのように指導したことの根底には、稿者の信念があるのではないだろうか（例：1-1 背景の「卒業研究を通し、学生には多くのことを知り、深く考える2年間にしたい」や、5-2 指導内容の「あまり研究に対して構えて欲しくないと考え、型を示すことが、学生の思考を矮小化してしまうのではと危惧した」）。それが、学生にとって良い方にも悪い方にも影響する可能性については留意しておくべきである。

これからの展望として、さらに2点挙げる。1点は、ゼミ生のみならず自主ゼミが定着するよう工夫することである。3名のゼミ生がオンラインで発表会練習をしている様子を見てみると、互いへの指摘や助言は非常に的確であった。個別ゼミ・全体ゼミにはない、自主ゼミで培われるものがあると考えられる。もう1点は、3,4年生の2学年合同ゼミを複数回おこなうことである。実習や行事などで、2学年の空き時間の調整は難しい実情があるが、月に1回は確保したい。3年生は2年間の見通しを持つことにつながる。また、他学年への発表によって得られる視点が増える。今後、経験の浅深に関係なく、その時の最善を考える姿勢を持ち、卒業研究指導にあたる。

主要参考文献

太田静江（2014）「今後の指導方法構築のための卒業研究論文の内容分析」『帝京短期大学紀要』、18、33-40.

金子元久（2013）『大学教育の再構築』玉川大学出版社

黄梅英（2018）「日本の教育型大学における卒業研究の教育実態—東北の大学を中心に—」『尚絅学院大学紀要』76、31-42.

厚生労働省「乳児家庭全戸訪問事業」

<<https://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/kosodate12/03.html>>(2023.3.30 確認)

中村博幸（2009）「講演 ゼミを中心としたカリキュラムの連続性—学生が育つ授業・学生を育てる授業—教員と学生が授業をつくる」『嘉悦大学研究論集』、51（3）、1-13.

山田嘉徳（2019）『大学卒業研究ゼミの質的研究：先輩・後輩関係がつくる学びの文化への状況的学習論からのアプローチ』、ナカニシヤ出版

謝辞

本稿の趣旨を受け入れ、資料と卒業研究指導内容の開示を快諾していただいたゼミ生3名に、心より感謝いたします。2年間、みなさんと完走できたことが何よりも喜びです。ありがとうございました。